

論文要旨

一橋大学大学院法学研究科博士後期課程 岸野幸枝

米国世論の戦争に対する選好とジェンダー観念：

『美しき魂－正義の戦士』のフレームが戦争の正当性に与える影響をめぐる一考察

1. 本研究の問いと目的

人々はどのような条件下で、出会ったことのない他集団を敵として理解し、他集団に対する軍事攻撃を正当なものとして受け入れるのか。本研究では、米国世論の軍事派遣をめぐる選好を分析することで、上記の問いに答えることを目的とする。とりわけ、世論研究にジェンダー国際関係論の視座を導入することで、伝統的なジェンダー観念に沿って戦争を語ることが、軍事派遣の正当性につながることを明らかにすることを目指す。

具体的には、本研究は以下の二つの目的を持つ。第一に、「米国の勇敢な兵士が、無垢で脆弱な紛争地女性を敵から救う」という、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって戦争を語ることが、米国世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国をめぐる世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高めることにつながることを、本研究では解明する。第二に、『美しき魂－正義の戦士』の影響力は、②救済者が男性であり被救済者が女性であること、および、人々が伝統的なジェンダー観念を信じていることにも支えられたものであることも検証する。分析の結果、一点目については概ねデータによる支持を受けたが、二点目については限定的にしかデータの支持を受けることができなかった。本研究では、二点目の実証が困難であった原因についても考察する。

2. 『美しき魂－正義の戦士』のフレーム

本研究では、ジェンダー国際関係論が述べる、「勇敢な男性兵士が脆弱な被害者女性を救う」という『美しき魂－正義の戦士』の考え方に沿った形で、戦争に関する情報を伝えることを、「知覚される現実の特定の側面を選び取り、その側面を強調してテキストを用いて伝え、その結果、問題の特定の定義・因果関係の解釈・（事象に対する）道徳的な評価・推薦される対処方法を（情報の受け手に対して）促す行為」（Entman, 1993, p. 52、筆者訳、括弧内は筆者が補足）であるフレームの一種であると考えられる。『美しき魂－正義の戦士』の考え方は、味方と敵、

強者と弱者、被保護者と保護者などの、戦争の二項対立的な側面に焦点を当て（特定の側面の切り取りおよび強調を行い）、戦争の原因を敵国に求めるとともに（特定の因果関係の解釈を伝え）、戦争の目的を正義の達成や弱者の保護として定義づけた上で（道徳的評価を伝え）、自国の軍事行為の正当性を促す（推薦される対処法を促す）役割を持つためである。この上で、本研究では、ジェンダー国際関係論で指摘されてきた、男性兵士には自国の女性を保護する責務があるという語りと、男性兵士には敵国の女性を保護する責務があるという語りのうち、後者の語りに焦点を当てる。

3. 本研究の意義

本研究の意義は以下の三点に分けられる。第一に、第二章でも指摘するように、人々の政策判断の基軸が、日常生活における基軸と全く異なるものであるとは考えにくいことが、本研究を行うモチベーションの一つとなっている。人々は家庭や職場の問題を処理することに日々手一杯で、日常生活と直接の関わりがない安全保障政策などの事象に対して注意を払う余力が十分にあるとは必ずしも言えない。こうした中で、人々の軍事政策をめぐる判断軸と、日常生活における判断軸が同一線上にあることが、パーソナリティや人種的ステレオタイプに焦点を当てた研究によって既に明らかにされている。一方で、これらの研究が、日常生活に浸透したジェンダー観念に着目することはほとんどなかった。本研究は、こうした研究群に貢献する形で、日常生活における判断軸と安全保障政策における判断軸をつなぐ社会観念として、ジェンダー観念に着目した研究を行う。

第二に、多様な日常生活における判断軸の中でも、ジェンダー観念に着目するのは、ジェンダー観念が安全保障領域でとりわけ顕在化しやすい社会観念であることによる。第三章で詳しく述べるように、安全保障領域においては、強さや権力志向といった男性性を備えた男性が主体となることが当然視されてきた。裏を返せば、この枠組みから外れた女性やマイノリティが主体となり、安全保障政策を担う場合には、社会の議論を呼ぶことが多かった。この暗黙の前提にも関わらず、興味深いことに、世論と戦争をめぐる研究領域では、ジェンダー観念やジェンダー・ステレオタイプに着目した研究が行われることはあまりなかった。本研究を通して、安全保障領域と切り離せない関係にあるジェンダー観念が、人々の戦争に対する考え方にどのように影響してきたのかを解明することを目指す。

第三に、ジェンダー国際関係論者と他分野の研究者の間に断絶が横たわっていることが、本研究を行う動機づけになっている。詳細は第三章に譲るが、軍事行為や軍事力の正当性とジェ

ンダー観念の繋がり、すでにジェンダー国際関係論研究者によって明らかにされている。だが、こうしたジェンダー国際関係論分野における知見と、戦争をめぐる世論研究分野における知見を融合したのは、ごく限られた世論研究者などに限られてきた。地域や時代の文脈を重視し、言説分析や歴史分析といった手法に焦点を当ててきたジェンダー国際関係論と、事象の法則性を明らかにすることを目的とし、定量手法や実験手法を主に用いてきた世論研究との間で、話す言語が異なってきたことが、両者間の断絶の原因の一つにあらう。本研究では、ジェンダー国際関係論の視角を導入しながらも、伝統的な世論研究で用いられてきた手法を用いることで、両分野を架橋することを目指す。

4. 理論と仮説

本研究では、七つの仮説を提示し、その妥当性の検証を試みた。一つ目の仮説群では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国を二項対立的にとらえる世界観を形成し、戦争の正当性を高めることを、四つの仮説を通して明らかにすることを試みた。第一に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、個人的な感情や経験に焦点を当てることで、戦争が聴衆にとって理解が容易なものになることから、『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報が、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する関心を高めやすいことを予想した（仮説1）。また、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、集団を敵と味方に区分する性質を持つことから、『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の敵国に対するネガティブな感情と、自国に対するポジティブな感情を呼び起こしやすいことを予想した（仮説2および3）。また、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、文化的共鳴性が高く、人々の選好に影響力を持ちやすいと考えられることから、『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する支持を高めやすいことを予想した（仮説4）。

さらに、二つ目の仮説群で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームと、ジェンダー・ステレオタイプの関係性を、三つの仮説の検証を通して明るみに出すことを試みた。まず、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに沿うことで、文化的共鳴度が高く、人々に対して影響力を持ちやすいフレームとなることを予想した。そのため、「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が男性、被救済者が女性である

ことで、より強く見られることが考えられた(仮説5)。一方で、反対に、この伝統的なジェンダー・ステレオタイプを打破して女性軍人が紛争地の男性を救った場合に、女性の扱いが先進的であるとして、自国の正当性が高まることも予想された。そのため、「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が女性、被救済者が男性であることで、より強く見られることが期待された(仮説6)。さらに、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの文化全体に対する共鳴度がいくら高かったとしても、その文化を個人が受容していなかったならば、『美しき魂－正義の戦士』の効力は限られたものとなることが予想された。したがって、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに強い共感を示す個人の間でより強く見られることが期待された(仮説7)。

5. 分析手法

本研究では、オンライン・サーベイ実験の手法を用いてデータを収集した。オンライン・サーベイは、近年の米国の政治学で非常に頻繁に用いられている手法であり、オンラインの労働市場の中でも中心的な役割を果たしてきた Amazon Mechanical Turk は、近年急速に実験を行う社会科学者の中で近年急速に受け容れられているサンプル収集の手段である(Paolacci, Chandler, & Ipeirotis, 2010)。Amazon Mechanical Turk では、参加者は Human Intelligence Tasks (HITS) を行い、タスク完了とともにクーポンコードを受け取り、クーポンコードを用いることで、タスクに応じた報酬を請求する(Boas, Christenson, & Glick, 2018, p. 3)。参加者は匿名でサーベイに参加することができ(Paolacci et al., 2010)、調査者と参加者の謝礼のやりとりも、Amazon Mechanical Turk を通じて行われる。本研究では、Amazon Mechanical Turk と比べてよりサンプルの代表性が高いとされる、Prime Panels を用いることで実験を遂行した。

まず、本実験では、オンライン上でサーベイを作成するプラットフォームである Survey Monkey を利用して、サーベイ調査票を作成した。その上で、リクルートメント・プラットフォームである Prime Panels を通じて参加者を募り、Survey Monkey で作成したサーベイリンクを通して、被験者を Prime Panels から Survey Monkey へ誘導した。この際、サーベイ参加者の質を担保するため、これまで行った Human Intelligence Task (HIT) に対する承認率が 90%以上の参加者、およびサーベイ参加時点までに承認された HIT の数が 100 以上の参加者

に限定して参加者を募った。また、同一の IP アドレスからの参加や、複数回の参加が疑われる人が集中している地域からの参加は禁止した。Survey Monkey 上のページで、被験者はサーベイに回答後、コードを取得した。このコードを Prime Panels 上で入力してもらい、コードによりサーベイへの参加が確認できた被験者について、Prime Panels を通じて一人あたり \$2 の報酬が支払われた。

6. 分析結果 1：『美しき魂－正義の戦士』と軍事派遣の正当性

仮説 1 から仮説 4 の分析を通して得られた結果は、以下のとおりである。まず、『美しき魂－正義の戦士』のフレームである女性の保護フレームを割り当てられた場合は経済フレームに割り当てられた場合と比して、敵国に対する好感度が低下し、自国に対する好感度が上昇し、軍事派遣を正しいと考え、軍事派遣を支持する傾向にあることが明らかになった。また、『美しき魂－正義の戦士』のフレームのうち、正義の戦士の語りを弱めたフレームである、女性の保護と兵士の自己利益を描いたフレームに割り当てられた場合には、経済フレームに割り当てられた場合と比して、紛争国に対する好感度が低下し、軍事派遣を正しいものであると考え、軍事派遣を支持する傾向にあることが解明された。だが、女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームと経済フレームの間で見られる差に比べて、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと経済フレームの間で見られる差は小さかった。これらの分析から、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、参加者の戦争に対する関心を高めこそしないものの、自国と相手国を敵と味方に分け、敵に対する軍事派遣を正当で好ましいものだと考える確率を高めることが示された。

一方で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心を高めるという仮説 1 が実証されなかった理由としては、以下の二点の可能性が考えられた。第一に、本実験で提供された文章は単純かつ非常に短いものであったため、経済フレームでもその他のフレームでも、認知面での獲得コストが低かった可能性が考えられる。この可能性を排除して因果関係を実証するために、実際の新聞の誌面で用いられる長さの文章を提示し、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力を検討することが、今後の研究では必要となつてこよう。第二に、世論の関心の計測の仕方が不十分であった可能性があった。本実験では、参加者に対して直接的に、戦争にどの程度の関心を持ったのかを聞いた。だが、参加者が、自身の関心の程度を把握していたのか、また、参加者間で関心の程度の各値が同じ意味をもっていたのか（すなわち、複数の個人の「極めて関心がある」は同じ意味を持っていたのか）は未知数である。こ

うしたことを踏まえて、今後の研究では、今回と同様に戦争に関する文章を提供した後に、再度戦争に関する文章を複数提供して、参加者に好きなだけ記事を読むことを促した上で、参加者が読んだ文章の数や、参加者が文章を読むために費やした時間を計測し、これらの変数を、戦争に対する関心を表す従属変数として用いる等の工夫が必要となつてこよう。また、同一の参加者に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによる文章と、経済フレームによる文章の双方を提供し、それぞれのフレームの直後に関心の度合いを質問した上で、両回答を比べることも、フレーム間の影響力の差をより正確に測ることができよう。

7. 分析結果 2: 『美しき魂－正義の戦士』とジェンダー・ステレオタイプ

仮説5から仮説7の検証を通して得られた結果は、以下の三点に分けられる。第一に、「勇敢な米国兵士が脆弱な紛争地の被害者を救う」というフレームが世論の関心・世界観・選好に対して持つ影響力が、保護者を男性、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられたものなのか否かを検討した。第二に、保護者を男性とし、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプが打破され、女性が保護者となり紛争地の男性が被保護者となった場合に、「勇敢な米国兵士が脆弱な紛争地の被害者を救う」というフレームの影響力がどのように変容するのかを検討した。第三に、勇敢な男性兵士が脆弱な紛争地女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』の影響力が、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する共感度の強さによって異なるのか否かを検討した。分析の結果、一つ目の点については、限定的にデータの支持を受けた。一方で、二つ目および三つ目の点については、データの支持を受けることができなかった。

一つ目と二つ目の点については、米国兵の性別と紛争地市民の性別の組み合わせを変更することで、複数の因果関係が惹起され、それぞれの効果を相殺し合った可能性に言及できる。たとえば、仮説5で述べたように、男性が保護者・女性が被保護者の場合、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに共鳴するために、軍事行為の正当性が担保される可能性に言及できる。同時に、仮説6で述べたように、女性が保護者・男性が被保護者の場合には、その伝統的なジェンダー・ステレオタイプに反することが、自国の優越性を示し、軍事行為の正当性を示す可能性が指摘できる。この二つの効果は互いに相殺しうるものであり、また、一人の個人は両効果は同時に経験しうる。そのため、性別の組み合わせの変更による効果が観察されなかった可能性がある。また、二つ目の点については、女性の軍隊への進出が進み、女性兵に対する抵抗が少なくなってきた可能性にも言及できよう。

さらに、三つ目の点について、仮説そのものが誤っていた可能性は否定できないが、ジェンダー・ステレオタイプの計測方法が不十分であったことは認めざるを得ない。すなわち、社会的望ましきのバイアスがかかりやすい質問文を用いてしまったことや、質問文が回答者の利害と離れた形で設計されていたことは否めない。社会的望ましきを排除した上で分析を行うために、直接的に女性の権利をめぐる立場を問うのではなく、同一の行為を行った場合に、行為者の性別によって行為に対する評価が異なるのかを問う等の工夫がありえたであろう。また、社会的に望ましくない回答を許す文面を挿入することの効果については議論があるものの(Näher & Krumpal, 2012)、多くの人々が伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対して強い共感を覚えていることを表す一文を、質問文の冒頭に入れる等の工夫も考えられよう。加えて、本研究の目的は、『美しい魂－正義の戦士』のフレームに見られるように、男女の求められる役割が異なることが、戦争の正当性につながってきたことを明らかにすることであった。だが、本研究で計測したジェンダー・ステレオタイプは、両性の平等な立場に対する態度であり、本研究で意図したジェンダー・ステレオタイプとは多少なずれがあると言わざるを得ない。そのため、今後の研究では、社会的に受け入れられない同一の行為（たとえば殺人など）に従事した男女に対する評価の差を計測するなどの手法をもって、ジェンダー・ステレオタイプを計測することが求められよう。さらに、今後の研究では、より回答者の日常生活が身近に感じられる質問の仕方をするのが臨まれるであろう。センシティブな項目について、どのようにして被験者の真意に近い立場を導き出すことができるのかという点は、今後の課題である。

8. 本研究のインプリケーション

本研究は、アカデミアもしくは実務界に、以下の三つの点でインプリケーションを持つ。第一に、『美しい魂－正義の戦士』のフレームが、個人や自国の利益に焦点を当てたフレーム以上に、戦争の正当性を高めたことは、戦争が必ずしも自己利益や自集団の追求という論理で動いていないという可能性を示唆するものであろう。もちろん世論の意向がそのまま対外政策に反映されるわけではないが、先行研究を踏まえると、世論の意向は無視できるものでは決してない(Baum & Potter, 2015; Tomz, 2007)。その上で、国家の安全保障行動を見る上で、マキャベリやホブズが述べるような自己利益や自集団の利益の追求に基づいた世界観がどこまで現実を表しているのかについては、疑問を挟む余地があろう。

第二に、本研究を通して、ジェンダー国際関係論で投げかけられてきた興味深い問いに取り組むうえで、実験手法や定量手法といった、いわゆる科学的な手法が有用であることに言及で

きよう。本研究は、言説分析をはじめとするその他の手法の重要性を否定するものでは全くない。だが、特定の手法を拒絶することによって、目的を同じくする他分野との交流が阻まれているのなら、その現状に勿体なさを感じざるを得ない。本研究を通して、ジェンダー国際関係論の問いに多様な手段で回答していくことの重要性を、示唆することができたであろう。

第三に、本研究は、実務の世界に対するインプリケーションをも持ちうるものであろう。今日において、ジェンダー観念は大きく変容する兆しを見せている。一方で、安全保障領域においては、伝統的な男らしさに基づいた論理が依然として正当なものとして受け容れられているかに見える。今後、社会におけるジェンダー観念がより一層の多様化を見せ、また、マイノリティという数にとどまらない女性が安全保障領域に参入していくことで、安全保障領域はどのような変化を見せていくのか。本研究で取り組んだ課題は、これらの問いに答えるための端緒となろう。